

第24回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門

『The Journey』 講評

一次選考は、ページごとにチェックポイントを設けて減点する方式で採点しています。誤字・脱字、絵本にふさわしくない言葉・漢字、あまりにも読みづらい文章、誤った日本語、原文にない勝手な補足、訳しもれ、極端な意識は、それぞれ減点の対象になっています。

参考までに、チェックポイントの例をいくつか挙げておきます。（タイトルページの次を1ページ目とします。）

文法的なことでは、

- ・ everything we have、everyone we know 関係代名詞の省略を理解できているか (p.14)
- ・ Shouting wakes us up. 主語が動名詞であることが理解できているか。 (p.25)

英文理解という観点では、

- ・ “What is this place?” ”And where is this place?” 違いを訳し分けられているか。 (p.11)
- ・ How will this be possible? this がその前の文をさしていることを理解できているか? (p.30)

不自然な日本語になっていないかという点では、

- ・ She shows us pictures of strange cities, strange forests and strange animals until she finally sighs. until 以下を前にもってきて文の順番を変えていないか。 (p.12)

などとなります。

こうした一次選考を経て、最終選考に残ったものは798通中、45作品でした。最終に残った作品は、ほとんど誤訳はなく、すばらしい訳がたくさんありました。実際、アンケートでも、英語自体はそんなに難しくなかったという感想が多かったようです。

では、なにが難しかったかといえば、やはり「難民」というテーマでしょう。翻訳は、外国語を日本語にただ機械的に移す作業ではありません（というか、それは不可能です）。なので、どうしても訳者の「解釈」が入ることになります。つまり、訳者の、背景に対する知識や理解、作品への思い、内容の理解などが、問われることになります。ちなみに、本コンテストには中学生部門もあり、毎年とてもいきいきした訳が出てくるのですが、今年にかぎっては苦戦している参加者が多かったのも、テーマが関係しているように思いました（同時に、だからこそ、中学生のみなさんにも、こうした世界の現実に触れる機会を持ってほしいと思います）。

また、絵本は、声に出して読む（読んでもらう）ことが多い文芸ですから、音読しやすく、また、耳から聞いて理解しやすいことが、とても大切です。採点の際は、こうした点も考慮しました。

以上のようなことを踏まえ、気になったのは次のような点でした。

p.1 But we never go there anymore,.....

ここの there は、家族で夏になると毎週のように遊びに行っていた beach (海辺、浜辺、砂浜、ビーチなど) のことです。漠然と「あのころにはもどれない」とか、「住んでいたまちにはもどれない」と訳さず、しょっちゅう行っていた場所に行けなくなったとわかるように訳すほうが、ごく当たり前だと思っていた日常が壊れてしまったということが伝わると思いました。

例：でも、もう ビーチへは いけない。

そこへいくことは、もう二度とない。

p.5 the war took my father

ここは、「兵隊にとられた」「殺された」とどちらの解釈も成り立つと思います。(どちらも、まちがいとしてはカウントしていません)

ただ最優秀賞の方のように、戦争はとうさんを「うばった」と英語の通り訳して、あとは読者の解釈にゆだねたほうが、より作者の意図により沿うと思いました。

p.12 She shows us pictures of strange cities, strange forests and strange animals until she finally sighs.

冒頭に書いたように、「ため息をつくまで～写真を見せた」は日本語としておかしいので、until の訳し方は注意してください。また strange は、ここではこれからいく知らない国の都市や動物のことなので、「奇妙な」「変な」よりは、「見たことのない」「ふしぎな」というニュアンスの方が合っていると思えます。

また、このあとの、・We will go there and not be frightened anymore. は「これ以上びくびくしないで、そこへいきましょう」というような訳が散見されましたが、(後半も)未来形なので、

例：そこへいきましょう、もうおびえてくらさなくてもよくなるわ(最優秀賞の方の訳より)

というふうに訳してください。

p.17-18 The further we go...the more we leave behind

こちらは the 比較級 the 比較級の構文です。

「わたしたちは取り残された」といった訳が意外に多かったです。

絵を見れば、どんどん荷物が減っていくさまがわかるでしょう。「置いていく荷物が多くなる」という意味の訳でも、いいと思います。でも、最優秀の方のように「いろんなものを後ろにのこしていく」と英語の通りに訳すと、物質的なものだけでなく、目に見えないいろいろなものも残してこなければならなかった子どもたちの悲しみや辛さがより深く伝わるように思いました。

p.27 we run and run, until a man we have never seen before he takes us over the border.

この「a man we have never seen before」は、おそらくお金をもらって国境を（違法に）渡している密入国業者だと思います。イラストからいっても、「親切なおじさん」のイメージで訳すと、伝わる雰囲気が変わってしまうように思います。

また、最終審査に残った方には少なかったですが、「国境“まで”つれていく」という誤訳も多かったようです。

p.39 they don't have to cross any borders.

ここは、鳥たちは「国境を越えない」と訳してしまうと、意味が違ってしまいますので、鳥たちは「国境など越えなくてもいい」、鳥たちには「国境なんて関係ない」というように、（自分たち人間とちがって）自由に空を渡っていく鳥たちへの憧れが強調される訳がいいと思います。

最後に。この絵本は主語の「I」が、兄と妹のどちらなのか、テキストや絵からはわかりません。英語で読む読者は、（多くは無意識的に）自分や自分の環境と重ねやすいほうを語り手に選ぶでしょう。

日本語に訳す場合は、「兄として訳す」「妹として訳す」「どちらでもとれるように訳す」という方法があります。兄か妹として訳したほうが、より感情移入しやすいかもしれませんが、どちらともとれるように訳せば、性別やきょうだい関係にかかわらず読者が自分を重ねやすくなるかもしれません（自分が兄だったら、兄と重ねる、女子だったら、妹と重ねる、など）。翻訳という観点からみれば、後者の方が技術的に難しいと思います。

なので、今回は、主語をどちらにしたか（またはどちらでもとれるようにしたか）については、採点の対象にしませんでした。入賞者の五人の方のうち、お一人だけ、どちらでもとれるように訳していらっしやったことを、お伝えしておきます。

最後にもう一度ポイントをまとめます。

- * 誤訳を少なくすること。（文法的に矛盾している点がないか、よく見ること）
- * 読み聞かせることを前提に、声を出して読んでみること。
- * 絵をよく見ること。
- * 最後に………関心を持って訳すこと！

では、また来年もぜひ参加してみてください！

英語部門審査員 三辺 律子